

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第四部

第二十七章

Alchinia's Hideaway

— アルチニアの隠れ家 —

峯村 明

目次

Alchinia's Hideaway	
お願い	2
登場人物	3
Alchinia's Hideaway	5
あとがき	15
奥付	19

Alchinia's Hideaway

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年08月10日記

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
マックス・ペイリー	古生物学者 健の友人
ボディーガードX	サーディクのボディーガード
アルチニア	『化学者の館』に在籍した女性
イリチャ	真の魂体

cast27.JPG

Alchinia's Hideaway

269.

アルチニアはメッサナ市の『化学者の館』のナンバー2だったが、ネウトラ評議会のヒューダーとはまったく面識がなかった。それぞれの守備分野が異なっていたということもある。

双方に共通するのがイリチャだったわけだ。

「おまえが言っていた『なぞなぞのおねえさん』の名がたしか……」（第十八章）

「そう、アルチニアさん」

「スフィンクスは謎に答えられない者にとって喰った、というのが」

「ほほ……私はスフィンクスではありません」

アルチニアは笑うと驚くほど印象が変わった。はっとするほど美しい。それも人間離れした、人造人間のような機能美、硬質な美しさだ、と健は思う。かといって、心を許していい相手なのか。彼女はなぜ警官に撃たれそうになり、警察から追われたのか。

「それは——彼が掘り当てたモノと関係しています」

アルチニアはペイリーを見た。ペイリーは健たちの会話に耳を傾けているようで、ほとんど上の空だった。彼は己が掘り当てたモノについて、頭の中で繰り返し、反芻していた。

270.

ペイリーのゴビ砂漠での発掘は頓挫しかかっていた。このプロジェクトを見直す必要が出てきた、と研究室が云って来たのだ。資金を出している研究室のお達しに逆らうわけにはいかず、仲間たちはいったん帰国することになり、荷物をまとめていた。

仲間の一人、カームがペイリーのところへやってきて話しかけた。

「なあ、ペイリー、帰り道に、ちょっと寄り道していかないか」

——俺は期待された結果の出せなかったプロジェクトに腐っていたこともあって、カームの誘いに乗った。ほかに二人がいっしょだった。俺たちはみなオーストラリアの別々の大学から発掘に参加していて、どうせ荷物をまとめて引き上げる途中だから、ってんで、カームの寄り道に加わったんだった。まあ、気晴らし、のつもりだったのさ。場所？
ゴビ砂漠の北、北西かな、なにしろゴビのどこかだった。

そこでなにか掘ってるから行ってみよう、カームの提案はそういうことだった。なんでも、アメリカのある博物館の試掘で、大学の研究員が4人も覗きにきたって、現地では大歓迎されたもんさ。そりゃこっちは見る目はあるからな。そこになにかある、ってすぐにぴんときた。なんていうかな、匂う、んだ。それも今まで見たこともない、とてつもない大物だって、俺たち四人は目を見合わせた。気がついた時には夢中で地面に這いつくばっていた。みんな——期待ではちきれそうだった——

で——何が出てきたかって？

全身骨格だ

「ティラノサウルスですか！？」抑えきれずに問うたのはXだった。仕事中は無表情に徹しているが、ペイリーの話聞くうち彼の目は輝きだした。全身、好奇心でそれこそはちきれそうになっている。

そんなXを上目で見て、ペイリーはゆっくりと首を横に振った。

「で、では、別の恐竜？ プロトケラトプス？ まさか、ヴェロキラプトル？」

ペイリーは固く目をつむりふるふると首を振り続けた。健は、もったいぶらずにさっさと言え！ と喉元まで出かかるが飲み込んでしまう。この恐竜大好き人間の、思い出したくもない、という仕草は異様だった。

＊

彼らは今、ブリュッセル郊外にいる。アルチニアが誘ったのは郊外の牧場だった。深

夜、牧場主の住居の一室……それも地下室……で、テーブルを囲んでいる。
 そこへ通されるなり、イリチャはちょっと笑った。「アルチニアさんらしいね」、と。
 変わった部屋だった。古めかしい型の地球儀、何かを測定する目的の大きな器械がいくつか。それらは調度品のように置かれていた。それとロウソク。円卓。神秘的儀式が行われそうな厳かな雰囲気。
 イリチャによると、これは「アルチニアらしい」、らしい。
 健はなんとなく、魔術師の仕事場、というイメージが思い浮かんだ。

＊

ペイリーの隣のイスにはアルチニアが座っていて、彼女はテーブルの上で震えているペイリーの拳にそっと手を重ねた。ペイリーは目を上げ、「あなたは知ってるんだな」と、小さな声で言った。

アルチニアはうなずいた。「貴方は逃げなければならなかった。私は逃げてくる貴方を待っていた」

「——ブリュッセル空港を出たとたん、車が近寄ってきて、轢き殺されるところだった！」

「貴方を待っていたのは私だけではない。『彼ら』もです。でも私たちは貴方を確保したわ。もう大丈夫よ。安心していいの。ね？」

ペイリーを巡って、ふたつの勢力がある。『アルチニアたち』と『彼ら…警察が含まれるらしい…』と。その焦点は、ペイリーが“掘り当てたモノ”だ。

健は言わずにいられない。「教えてくれ、ペイリー。なにを見つけたのか」

ペイリーは健に目を当て、深呼吸を繰り返した。吸って、吐いて、吸って、吐いて……そして……

「全長5尺の、全身骨格だ。人間の」

「全長5メートル——人間——巨人——？」

ペイリーは大きく息を吐いた。全身から力が抜けるのが傍目にわかった。

「彼は……彼女かもしれないが……地中に仰向けに横たわっていた。倒れて苦しんで死んだんじゃない、誰かが丁寧に埋葬したんだ。胸の上の金属製の丸い輪っかは大きさからして冠だ。

そいつはひとりじゃなかった。王として君臨する社会があった。家族、仲間、それとも部下が埋葬した。骨格のどこにも傷はなかった。暴力を受けずに死んだらしい。——中生代後期という地質学的時代に。

バカでかい頭蓋骨は空を見上げていた。どうみても人間の頭蓋骨だった。俺は黙って、ソレを見ていた。なんだコレ。どーすりゃいいんだ」

「そのうち、誰かがスコップで土を放り始めた。埋めようとしてたんだ。埋め戻そうと。見なかったことにしよう。みんな、ひとりのこらず、ひとこともしゃべらずに、懸命に働いた。みんな、おんなじことを考えてるのが手にとるようにわかった。見ちゃいけないモノを見ちまった。なかったことにしよう。だって、コレを認めたら、俺たちみんな失業しちゃうんだぞ！！」

ペイリーの声はしだいに大きくなっていき、しまいにはテーブルを手のひらで叩き、叫んでいた。巨人の骨はその手でペイリーの現実をつかんで思いきり揺さぶっていたのだ。

ある意味、健もぼう然としていた。

健はヒューダーの記憶として、この世界にはかつて巨人がいた事実を、よく知っているから、その遺骨が発見されたと聞いても、それほど意外じゃない、という感覚だった。

ペイリーは古生物学者であると同時に『超古代文明同好会』のメンバーであるからして、大昔のモノに関して耐性がある、はず、ちっとやそっとのことで驚いたりしない、はずなのだ。

が、己自身の現実と結びつかんとするモノは全身全霊で拒絶したいらしい。現代人にとって『超古代文明』とは、安全地帯から眺める謎めいた異物でなければならず、己に関わってはならないのだ、ペイリーの態度はそう語っている。

おそらく——それがおおかたの現代人の感覚なのだろう。

そして、ペイリーの現実を揺さぶる事実にはまだ続きがある。

272.

「照り付ける午後の陽射しの下で、俺たちが黙々と埋め戻しを進めているときだった。『やつら』がやって来たのは」

「当局の人間だ。作業の進捗状況を見に来たんだろうと、試掘メンバーのリーダーが呟いた。

八方が地平線の向こうまで広がるゴビ砂漠も、どこを掘っても構わないってわけじゃない。この地点を掘りたいって、計画書やら申請書やらを当局に提出し、許可をもらわなきゃならん。当然、手続きは済んでいたさ。

ところが『やつら』の態度は冷たかった。『やつら』は無許可の発掘を摘発しに来たんだ。

『冗談じゃない！』、リーダーは叫んだ。『許可証ならあるぞ！　ちょっと待っててくれ、今、とってくるから』憤慨したリーダーが背を向けたとたん、彼の足元で土が舞った。『やつら』、銃を持っていたんだ。

『勝手に動くな。全員車に乗れ。首都まで連行する』

もう——頭っから犯罪者扱いさ。俺たちみたいに他国で活動する機会のある者は、当国の法律やら情勢やらを一応調べてから入国する。それもこれも穏やかに学問を迫するためだぜ。そこまでルールに従ったあげくが、無許可の発掘だの、違法の摘発だの、警告なしの発砲だの！　ありえねえんだ！

そしてもっとありえねえことが起こった。俺たちが仕方なく車に乗り込もうとしていると、『やつら』、原状復帰だとぬかして発掘現場に爆弾を剥げこみやがったんだ！　爆弾——爆弾だぜ！？

おかしい！　変だ、なにもかも変だ！　こいつらほんとに当局の人間か！？　そう思っても目の前で仲間が撃たれそうになり、爆弾なんか使われてみろ、恐ろしくて、頭も体も動かねえんだ、俺たちただの、善良な学者なんだから。

それでも誰が言い出したものか——爆弾が何発も破裂している間に、俺たちは逃げた。車は幾台かあったから、分乗して、もう散り散りだった。みんながどうなったかはわからん。気がつけば俺はひとりで砂漠を突っ走ってた。

車の燃料は早々に尽きた。もちろんガソリンスタンドなんぞない。俺は車を乗り捨て、歩いた。何日も、歩いて歩いて、ようやく村みたいなところについた。地の果てみたいなのとこだったが、ありがたいことに飛行機が止まった。首都への国内便で、すぐに飛ぶというから、迷わず乗り込んだ。あんまり近づきたくないが、外国へ出るには国際空港へ行くしかないからな。

そして首都の国際空港から出発する一番早い便がベルギー行のだった。そこで初めて、ブリュッセルにいるヒヤマのことに思い至ったというわけさ。

273.

「——大冒険、だったんだな」と、健はぼつりと言った。ブリュッセルの病院で『逃げてきた』と聞いた時は思わず気色ばんでしまったが、ペイリーは本当に命からがら逃げてきたのだ。

「ああ……」ペイリーは呻いてうなだれた。「いつ死んでもおかしくない状況だった……最後の命綱はおまえから借りたカネが入ってるクレジットカードだった。おかげで……助かった」

あまりに殊勝なので、もう返済しなくていい、と口から出かかったが、ソレはソレ、コレはコレだ、今まで通り分割で返してもらおう。

「でもって——ブリュッセル空港をでたとたん、車が近寄って来た。ありゃ、ぜったいにわざとだ、俺は殺気を感じた！ まだ話は終わってなかったんだ！ なんでだ、俺がいったいなにをしたっていうんだ！

アルチニアさんとやら、おたくはなんで俺を助けたんだ、俺は——警察に追われる身なのか？？ どうして！！」

テーブルをかこむ一同の目がアルチニアに集まった。それはペイリーが被ってきたトラブルの中で、もっとも理解しがたいものだった。

「私たちは……」、とアルチニアは静かに語りだした。

「観察、していたのです。巨人の骨だけでなく、もっと衝撃的な太古の遺物を隠したい勢力がいる。うっかり発見してしまった者は『彼ら』によって口止めされる。

実は、そういった事態は無数にあります。たくさんの遺物が有形無形の圧力によって隠されてきました——」

健は学生時代の夏休みを思い起こす。《ミッドランタ》でペイリーと語りあった夜を。
(第四章『Exciting vacation』)

＊

——どういうわけか学会という世界では、一万二千年より前には地球上に文明はなかったことになってる。人類の進化も、地質学も、考古学も、あらゆる学問がその前提で積み上げられているから、前提がまちがっていたとしたらどうなる？　積み重ねたものがぜんぶ崩れてくる。考えただけで恐ろしいわ！　そりゃあ、無視したくもなるさ！　人類進化のミッシングリンクの正体は実は宇宙人だなんて言いだしたヤツの口を塞いで袋叩きにするのが最善の道なのさ。おおぜいの利益のためにはな」

「なあ。ある説が、正しいかどうかは問題じゃないんだ。利益になるかどうかなんだ」

「だから超古代文明なんて、うっかり口にできないわけさ。ヘタをしたら、袋叩きにされて口を塞がれ、ついでに息の根を止められちまう。実際、おれの知り合いにおそろしくえげつない目に遭ったのがいるよ。気の毒に、音信不通になっちまった——

＊

「私たちは観察していたのです。貴方の仲間のカームは私たちに情報を提供してくれました。同時に、仲間の中に『彼ら』と繋がりのある者もいた。

そしてついにカーム本人が事件に巻き込まれ、ある日、連絡してきました。『首都から外国へ逃げ伸びることが出来そうなのが何人かいる。彼らを頼む』と」

「——」

「かの国の首都から外国へ向けた便を一つ残らず調べました。私が担当したベルギー到着の便から降りた乗客の中に、貴方がいたのです。『彼ら』の追跡はじつに綿密で、執拗です。さまざまな理由をつけて、地元の警察さえ動かします。警察はなぜあなたを捕らえなければならないのか本当の理由を知りません」

「——カーム——やつはどうした？　逃げる際にはぐれちまって——」

「以後……音信不通です」

「え——じゃ、じゃあ、俺のほかに国外へ脱出できたやつは」

アルチニアは静かに首を振った。

「俺だけ？　まさか俺だけ？　ウソだろ？　なんで？　彼らはどうなったんだ??」

「命を失うことはないようですが.....先ほどもいいましたが、有形無形に、執拗に脅されます。すると.....彼らの学問への意欲は失われます。永久に」

マックス・ペイリーは言葉を失った。そして身も世もなくすすり泣いた。

274.

健はペイリーにちょっと休むよう勧め、脱力してしまったペイリーをイリチャとXが両脇から支えた。

彼らが部屋の壁ぎわのソファに落ち着くのを待って、アルチニアに向き直った。腹を括って率直に話さなければならないと思う。

しばし逡巡していると、彼女の方が口を開いた。「聞いていいかしら。貴方とイリチャの関係を」

健はちらりとイリチャを振り返った。「オレとイリチャ。ネウトラ評議会のヒューダーはイリチャの名付け親だ」

するとアルチニアは目を瞠った。「初めて彼の名を聴いた時、とても不思議な感じを受けたわ」

「——どんな？」

「イリチャ。闇を貫く光の矢。光とは可視化された愛。イリチャという言葉の波動は彼を根本から揺るがした。そう.....彼は深い慈しみと愛を贈られた」

「.....名前をつけたのはもののはずみで.....」

アルチニアはふっとほほ笑んで、それ以上深入りせず、話題を変えた。「評議会ではどんなお仕事を？」

健は目をまっすぐにアルチニアに向けた。「巨人族の調査専門のグループに所属していた。団長はダーヴェという」

「ダーヴェ団長！ お噂はかねがね！ ぜひ一度お目にかかりたいと思っていました！」

健は目まいを覚える。『ダーヴェ』、また、『アルチニア』が肉体をもって生きていたのははるか遠い昔のことだ。

アルチニアはため息をついた。「これはとてもとてもセンシティブな問題なのです。相手の素性がはっきりしないうちはうかつな事が言えません。貴方はかつてネウトラ評議会でダーヴェ団長とご一緒に巨人族の調査をされていた！」

「ええ、ダーヴェ団長とまではいかないが、専門家みたいなものです。うかつな事を話してくださっても大丈夫ですよ」

冗談とも皮肉ともつかないセリフが口から滑り出た。大きな謎に足を踏み入れてしまった予感があった。

275.

「『彼ら』、つまり、ペイリー氏らを襲った勢力は、巨人の存在を隠しておきたいのです」
「——なぜ」

「巨人とはひじょうな太古から、人間の文明と深く関わってきた存在だから」

健の中のヒューダーはふと眉をひそめた。ダーヴェ調査団が持っていた情報からしても、巨人にはわからない点が多い。彼らの生きていた時代には巨人族はもはや過去の遺物だったのだ。

ヒューダーははたと思い至る。

古い時代に、食人する巨人の対処をめぐる、人々の意見が対立したことを。対立は深まり、ふたつのグループが生まれた。ひとつは『ネウトラ評議会』であり、ひとつは『化学者の館』だ。

そもそも——ヒューダーとアルチニアとは、巨人について異なる見解を持つ者同士ということになる。

だが、今となってはヒューダーは健の一部であり、健はヒューダーを客観的に視ることができる。たとえば、ヒューダーが持っている巨人族に対する見解が、非常に偏ったも

のかもしれない、ということなどだ。

「評議会は——巨人族とは人間の生存に害をなす危険なものと認識していた。貴女方.....『化学者の館』は違うとらえ方をしていた？」

己の認識不足を露呈しているのかもしれないと健は感じていた。また、そんなことを言ってる場合ではないということも、うすうす感じていた。

「人間を一括りにできません。巨人族も同じなのです」

「——」

「人間の師であり、友でもある。そういう巨人族がいたことを、ぜひ心に留めておいてください」

ぐらり、と、ヒューダーは健の中で足元が揺らぐのを感じた。人目もはばかりず呆然自失しているマックス・ペイリーは、健の鏡だったのかもしれない。

あとがき

ゴビ砂漠はモンゴルと中華人民共和国にまたがってまして、恐竜の卵や骨格の化石は砂漠のほぼ中央、両国の国境に近いところ、モンゴル側で発見されました。中国側にもなにかあるんじゃないかと思われそうですが、情報はまったくありません。まあ、お察しください。

↓ 赤い点線内がゴビ砂漠



ゴビ砂漠.jpg



モンゴル.jpg

2026 年 7 月 31 日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十七章 Alchinia's Hideaway

2026 年 8 月 1 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「ぱくたそ」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

I Akira Minemura 2025-2026

リ・コンストラクション-27

著 者 峯村 明
イラスト ばくたそ

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
